

研修と研究の先にあるものを常に意識して

超スマート社会、グローバル化や人口減少など社会構造の急速な変化に、教育を取り巻く環境も大きく変化していこうとしている中、いま、学校現場は様々な喫緊の問題に直面しています。深刻化するいじめ・不登校、ネット依存、児童虐待等への対応、さらに新学習指導要領による指導改善、その一方で働き方改革等々、学校や教員にとって、これほど重大な局面に立たされ意識変革が求められることは今までなかったように思います。

このような中、昨年4月に組織再編して2年目となる福井県教育総合研究所では、これまでの研究テーマである「研修と研究との一体化」をさらに前進させるため、「事業の見える化」を図ることを常に意識して取り組んできました。研究所の仕事がどれだけ学校現場に浸透し効果をあげているか常に確かめながら業務改善を行っていくことが、学校や教員に寄り添うサポート機関としての使命だと考えるからです。研修の場を提供する先にあるものを常に意識して研修プログラムを開発し、研究においても、学校現場の指導改善につながる提案型の研究であることが必要です。このような中、今年2月15日の研究発表会では県内外から多数参加をいただき成果を報告できたことは大きな収穫でした。

本紀要は、教職研修・教科研究・教育相談の3センターと新設の先端教育研究センター・サイエンスラボ・教育博物館のそれぞれの研究成果と業務成果について報告するものです。今年度の成果の一端をご覧いただければ幸いです。

総合研究所発足にあたり、先端教育センターに設けた「特別研究員」制度により、著名な3名の先生方に特別研究員にご就任いただき、英語教育、理科教育、教育相談各分野の研究に関する助言・指導をお願いするとともに、講演会や公開授業など実践的な活動にもご尽力いただきました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。なお先生方には本紀要にご寄稿いただいております。

先日、ある特別研究員の方が、「未来のことは誰にもわからない。だからこそ未来のために今できることをやりましょう」とお話してくださいました。私たちは教育現場の指南役として担う責任の重さを痛感しつつ、「自ら学び続ける研究所」として、現状に甘んずることなく新たな教育課題に向かって挑戦し続けていきたいと思っております。

福井県教育総合研究所 所長 牧野行治